隠し剣　十二支抄

子　丑　寅　卯

辰　巳　午　未

申　酉　戌　亥

宇佐木歳之助（うさぎとしのすけ）が何とか年越しを迎えられたのは、疑いもなく葉仁（はに）のおかげだった。

歳之助は市井で用心棒稼業を営んでいる貧乏浪人である。銭金にはいつも困っている。大晦日の五日ほど前に、馬車馬堂（ばしゃうまどう）という黄表紙屋の用心棒を引き受け、ようやくになにがしかの餅代を手にした。

そこまではよかったのであるが、その翌日辺りから、どうも気分が優れなかった。

頑健なことと、多少剣の腕が立つことだけが取り柄であった。もちろん、それまでに大病を患ったこともない。そのまた翌日には何かおかしいと思い、なけなしの銭を払ってでも医者に診てもらわねば、と思い立ったときには、最早身体が満足に動かなかった。

長屋の、戸の前で倒れていた歳之助を見つけたのは、二軒隣りに住む葉仁だった。葉仁は、近くの住人と力を合わせて、大柄な歳之助を運び入れ、つきっきりで看病してくれたのだ。

正月。歳之助のもとへ湯を運んでくれた葉仁に、歳之助は頭を下げた。

「大変世話になった」

葉仁は大げさに、驚いた顔をする。そろそろ二十五に近い年頃のはずだが、表情が豊かで、三つ四つは若く見える。といえば聞こえはいいが、むしろ幼く感じられることがある、というのが歳之助の見立てであった。

「お侍様が、そのように頭をお下げになるものではありません。それに、困ったときはお互い様でしょう」

「なに、拙者など、侍といっても形だけのものよ」

「また、そのようなことを」

葉仁に睨まれ、歳之助は笑みを浮かべつつ、すまぬ、とだけ言った。

「しかし、助かった。もう、年は越えられぬと思っていたが」

「大げさです。普段、病などなさらないからですよ」

「確かに、少々取り乱した」

「でも、もう大丈夫そうですね。あと一日も寝られれば、お床をあげられましょう」

お大事に、と言い残して、葉仁は帰っていった。

いい子だ、と歳之助は思った。どこの何者ともわからぬ己に、あの娘は何くれとなく世話を焼いてくれる。そうして、歳之助は世話になりっぱなしだった。

歳之助が恩を返したような類のことをしたのは、ただの一度だけだった。

葉仁の長屋に、蛇が出たことがあった。ちょうど歳之助が用事を終えて帰ってきたとき、戸から葉仁が飛び出してきたのだ。

話を聞いた歳之助は一人、家に入った。たしかに、囲炉裏の前に大振りの蛇が一匹、這っていた。

蛇は歳之助を認めると、鎌首をもたげた。その隙に、歳之助は一刀のもと、蛇を斬って捨てた。

あとで調べたところによると、それは毒蛇であったということであった。

歳之助が葉仁を助けるようなことをしたのは、あとにも先にもあれ一度っきりであった。

まさか、あの一度を心に抱いて、ここまでしてくれているわけではあるまいが。

葉仁が自分を憎からず思ってくれている、という感じはある。葉仁はあの歳でいまだひとり身のようである。表には見せぬが、焦りもあろう。

自分がもらってやる、というのはどうだろうか、と考えぬこともなかった。生活は、まあ、何とかなるで

あろう。
　だがそれもこれも、葉仁がどう思っているのかを確かめてからの話でしかない。
　話をしてみるか。だが、断られて、長屋付き合いが疎遠になってしまっては、歳之助は困る。
　どうしたものか。
　そのようなことを考えつつ、いつの間にやら眠りに就いていた。

　目を覚ましたのは、おそらく夜中であった。
　何やら外が騒がしい。男と、そして女の怒鳴る声がし、女の声には、聞き覚えがあった。
　夜着のまま、刀だけを手に外に出た。
　雪が薄く降り積もっている。だが、空は澄んでいるのか、月が丸く見えていた。
　ゆっくりと、声のする方へ歩みを進めた。男の方は知らないが、女は、やはり葉仁だった。
「どうした」
　横手から声をかけると、二人が振り返った。
「なんだ、てめえは」
　男が真っ赤な顔で、歳之助に向かって怒鳴る。
「なんだ、ではない。まわりを見ろ。皆、起き出しているではないか。こんな夜中に騒いでは、迷惑だ」
「うるせえ。この女が、金さえ返してくれりゃ、大人しく帰ってやるさ」
「正月に掛け取りとは、面妖なことじゃな」
「大晦日にも来たが、いなかったんだよ。病気の知り合いを見舞っていた、とか言いやがってな」
　葉仁も叫んだ。
「嘘じゃありません！　それに、そんなお金！　わたしは知りません！」
「卯太郎（うたろう）ってのは、てめえの亭主だろうが。別れたんだろうがどうだろうが、そんなことは、こっちはどうでもいいんだよ」
　歳之助にも、いきさつはだいたい飲み込めた。葉仁が一度結婚していたことには驚いたが、表には出さなかった。
　男を見る。明らかに、やくざ者だった。懐には、おそらく得物を呑んでいるだろう。
「それくらいにしておけ。それならば、卯太郎という者から取り立てればよいではないか」
「うるせえ、お侍。口を出すんじゃねえよ」
　歳之助は肩を鳴らした。
「どうしても帰らぬか」
　察したのか、男が口をようやく閉じた。歳之助に向き直り、腰を落とす。
「だとしたら、どうするってんだ」
「その娘には、借りがあってな。幾分でも、返させてもらうとしようか」
「おもしれえ」
　男が懐から匕首を抜いた。それを見て、歳之助も刀を抜き放ち、峰を返した。
　男が突っ込んでくる。一刀で終わらせるつもりだった。
　刀と匕首が打ち合った。男が素早く飛び退る。歳之助は、片膝をついた。
　長らく臥せっていたためか。足が動かぬ。そのことに、歳之助は、今になってようやく気が付いた。
「何でえ。ふらふらじゃねえか」
　笑みを張り付けたまま、男がもう一度、突っ込んでくる。
　視界に、月が入った。剣を握ったままの拳を、地に押しつけた。

　月に向かって、跳んだ。
　宙にいる間に、上体を動かした。月明かりに、刃が一度、煌めいた。
　男と歳之助は、同時に雪中に倒れ伏した。
「宇佐木さま」
　葉仁が駆け寄ってくるのがわかった。泣きそうな顔をしている葉仁に向かって手を伸ばし、その身体を抱き留めた。
「大丈夫だ。斬られておらぬ。足が、動かぬだけよ」
　言葉が、届いたのかどうか。月の下、葉仁の泣き顔だけが照らし出されていた。
　不意に、思いも寄らぬ言葉が、口をついて出た。
「添うか。お主さえ、よければだが」
　葉仁の表情が、すぐに変わった。
「わたしは町人ですよ。よろしいのですか」
　歳之助は、声を上げて笑った。
「言ったであろう。拙者など、侍といっても形だけのものよ」
　葉仁を抱く手に、力を込めた。月と、その中で跳ねる兎が、二人を見下ろしていた。

（完）

「卯衛門（うえもん）を見つけました」
　馬車馬堂（ばしゃうまどう）から戻ってきた辰之介（たつのすけ）が、お竜（りゅう）に告げた。
　刀を受け取った手を止めて、辰之介を見る。辰之介の顔いろは、いつもと変わらぬふうである。ただ見たことを、姉に告げた。そういった態度であった。
「どこで見たのですか」
　草鞋を脱ぎ、足を洗う弟の背中に問いかけると、店に来たのです、と返って来た。
「金を借りに来ておりました。えらく痩せていて、髪も髭も伸び放題でしたが、違いない。まさしく卯衛門でした」
　辰之介は馬車馬堂という名の両替商で用心棒をしている。この馬車馬堂は、もとは小さな黄表紙屋だったのだが、その頃に出した奇天烈本という、化け物が人にのりうつる話や、目の見えぬ僧が夜目の利かぬ侍に光る瞳を与える話といったような、一風変わった黄表紙を売り出して儲け、その金を元手に両替商をはじめたという変り種である。黄表紙屋は裏店に今でも残っていて、忙しいときには辰之介が使いに駆り出されるときもあるのだという。
　正月が明けて、今日が仕事のはじめであった。両替屋の店先は金子のやり繰りに詰まった客たちが押しかけ、辰之介も金を運ぶ手代を守って蔵と両替屋と黄表紙屋を回ることになった。
「卯衛門を見たのは、ちょうど蔵から店に戻ったときだったのです」
　揉め事が持ち上がらぬ限り、店先に用心棒が顔を出すことはない。たまたまが重なって、辰之介は卯衛門と顔を合わせることになったのだった。
「たしかなのですか」
「はい。右の顎に、傷もありました」
　それを聞いて、お竜も納得した。父がつけた傷に、違いないと思った。
　父である寅之助（とらのすけ）は徒士組の小頭であった。あれも正月を過ぎたばかりの頃であったと思う。徒士組の者たちがいつも米を換えている札差のところで、騒ぎが持ち上がった。知らせを受けた父は配下二人を連れ、札差の店先へ向かった。
　暴れているのは、同じ徒士組の卯衛門であった。受け取る金子の量が少ない、というのがその理由であった。
　他藩の例に漏れず、この藩でも先年より米の一部借り上げがはじまっていた。上げ米は、いわば実質的な減棒である。受け取る銭が今までより少なくなるのは、至極当然である。
　だが卯衛門は、その施策に得心いかぬようで、札差相手に怒鳴り散らしていた。どうやら、酒も入っているようであった。
　父は卯衛門を諌めようと近付き、一言二言声を掛けた。そうすると、卯衛門は突然刀を抜き、父に斬りかかったのだ。
　一刀を受けながらも、父は抜き合わせ、切り結んだ。そうして、下からの一撃で、卯衛門の顎を切り裂いた。
　だが、そこまでだった。
　傷は深手であったようで、父は倒れ伏した。それを見た卯衛門は、背を向け走り去ったのだという。
　すべて、それを見ていた父の配下から聞いた話である。お竜が十七、辰之介が十四の頃のことであった。
　卯衛門は出奔した。武家のしきたりで、辰之介が跡を継ぐには、仇討ちを果たさねばならない。

　そうして三月後。ふたりは卯衛門が潜んでいると噂のあった隣藩へと旅立ったのだ。
「向こうは、そなたがわかったようでしたか」
「いえ」
　卯衛門と辰之介が顔を合わせたことは幾度もない。そして、卯衛門は子どもの頃の辰之介しか知らぬ。わからぬのも、無理はなかった。
　辰之介がかまちに上がり、部屋へと足を向ける。お竜もあとを追った。着替えを済ませた辰之介と、部屋の真ん中で座って向かい合った。
「いかがいたしましょう」
「考えるまでもない。住処をつきとめ、父上の仇を討つのです」
　弟を睨みつけるが、弟はいつもの如くで茫洋としている。お竜は大きく息を一つ吐いた。
　辰之介が七つのときに母が亡くなってより、お竜は三つ年の離れた弟の母親代わりとして生きてきた。己に、課したといってもいい。
　もとより、弟の世話を焼くのが嫌いではなかった。手取り足取り、大きなことから細々としたことまで、辰之介の所作に口を挟んだ。辰之介は素直で大人しく、いつもお竜に従い、ほとんど歯向かうということがなかった。
　気がつけば。気持ちを表に出さない、無為として、己の意見を一切口にしないような。そんな男ができ上がっていた。
　お竜は思う。自分は、母がいなくなった寂しさを、自分が母の代わりとなることで埋めてきたのではないか。己の空白を埋めるために。己に使命を課し、寄る辺を得るために、たった一人の弟を犠牲にしたのではなかろうか、と。
　そして今、埋めるための中身を姉に吸い上げられたような弟が、目の前に座っていた。
　辰之介は暫く考えてから、口を開く。
「斬れましょうか。わたくしに」
「何を気弱なことを。斬るのです。何としても」
　藩を出るときに、辰之介は通っていた衿屋道場より折紙を受けている。少なかれ祝儀といった意味合いはあれども、腕は悪くないはずであった。
　だが、父を斬った卯衛門は、藩でも随一の遣い手であるといわれていた。辰之介の腕前では、太刀打ちできぬであろう。それが周囲の評であったし、お竜もまた、心の奥底ではそう思っていた。
　だからこそ、辰之介について、一緒に出てきたのだ。
「ですが姉上。わたくしが見たところ、卯衛門は重い病を得ているようでした。金子を借りに来たのも、おそらく医薬代のためだったのではないかと」
「われわれにとっては好都合というものです」
「病に苦しんでいるものを、斬るのですか」
「父上の仇なのです、辰之介」
　辰之介が項垂れる。これでよいのだ、とお竜は思った。辰之介はお竜に逆らわない。今までそうだった。そしてこれからも、そうだろう。
　辰之介が顔を上げた。
「卯衛門は、また来ると思います」
　お竜は頷いた。

　辰之介と話をして、三日ほどあとのことだった。

あの日からお竜は思い悩んでいた。ともすれば卯衛門との対決が頭を過ぎり、家事が手につかない。落ち着かぬ様子で、日々を過ごしていた。
本当にそれでいいのか。もう一人の自分が、囁きかけているような気がする。
藩を出て、三年が経っていた。出てきたばかりの頃は住まいを見つけるのにさえ難儀したが、今では家を持ち、辰之介が用心棒の口を得て、暮らしも楽ではないまでも、それなりに生きていけるようにはなっている。
卯衛門を討ったとして。帰参したところで、果たしてわたしたちの居場所はあるのか。辰之介は本当に、父の跡を継げるのか。そのような不安が、胸にせり上がってきていた。
何が正しいのか、わからない。だが、自分が決めねば、何も進まない。
決めねばならぬのだ。そうするしかないのだ。そう言い聞かせて、不安を抑え込んだ。
馬車馬堂の小僧が飛び込んできたのは、溜め込んだ不安が、お竜の中で破裂しそうに膨らんでいた頃だった。
「先生が」
その言葉だけで、お竜はすべてわかった。
先祖伝来の、黒鞘の懐剣を左袖に落とし、小僧のあとに続いた。
追われる者は、周りの視線に対して勘が鋭くはたらいている。卯衛門はきっと、辰之介に気付くだろう。お竜は確信していた。
そして卯衛門ほどの腕の持ち主ならば、逃げるよりは返り討ちを狙うだろう。そう思った。
だが、走りながら小僧に問いただしてみると、意外な答えが返ってきた。
「お侍を連れだしたのは先生の方で」
背筋が凍った。どういうことだ。辰之介が己で何をか考え、行動を起こしたのか。
「あの河原です」
小僧が橋を指し示した。お竜は小僧を追い抜くと、格好も気にせず土手を駆け下りた。
幅十間ほどの小さい川である。その川越し。向かいの河原に、辰之介と卯衛門がいた。
卯衛門は上段。辰之介は正眼につけて、対峙している。やはり、とお竜は思った。
辰之介は、自分一人で、決着をつけようとしたのだ。
卯衛門は辰之介より一回り大きいが、酷く痩せて見える。顔色も青白く、辰之介のいうとおり、病を得ているようであった。
だがそれでも、卯衛門が一段か二段、勝っている。己も剣術修行を積んだことがあるお竜は、そう見た。
助太刀をするべきだ。だが、今から橋を渡っては間に合わぬ。
卯衛門が鋭い一撃を放った。鍔元で辰之介が受け止める。だがそのまま、圧力でじりじりと上体を押し込まれる。
お竜は川縁まで走った。
卯衛門が押す。辰之介がよろめきながら離れた。その隙を逃さず、卯衛門が胴薙ぎの姿勢に移る。
お竜は左袖に右手を突っ込んだ。二本の指で柄を強く挟み、鯉口を切って鞘を落とす。
右手から抜き身の懐剣が飛ぶのと。鞘が袖奥に落ちるのがほぼ同時だった。
真っ直ぐに投じられた短剣が川の水面を跳ねる。
一度。二度。
十二度跳ねた刃が、向こう岸に届いた。
白刃が卯衛門に迫る。目の端にそれを認めた卯衛門が、横に向けた刃で必死に弾いた。
辰之介が動いた。

　下段から、摺り足。腰下より巻き上がった一閃は卯衛門の刀の根を噛み、そのまま跳ね上げた。
　空より落ちた刀は土手に突き立ち、無手になった卯衛門の喉元に、辰之介の剣先が突きつけられていた。
　見事、という声が、お竜の喉から思わず漏れた。
　崩れ落ちる卯衛門から剣を外した辰之介は、そのまま鞘に収めた。
「我らが父の仇、卯衛門は、ただ今死にました」
　穏やかな笑みだった。
「我らは今、穏やかに日々を暮らしております。これ以上を、望もうとは思いませぬ。あなたを追うことも、もうありません」
　その言葉を聞いたとき。お竜の奥底にあった、何か重しのようなものが、溶けていったような気がした。
　よかったのか、辰之介。あなたはこれでよかったのですか、辰之介。
「どうぞ、お健やかに」
　辰之介が卯衛門に一礼し、背を見せて土手を駆け上がる。その背に、天に昇る龍を、お竜は確かに見た。
　お竜は左袖に残った鞘を取り出すと、その場にしゃがみ込み、そっと川に流した。春先のまだ冷たい流れに乗って、それは離れ、静かに消えていった。

（完）

巳之助（みのすけ）がそれを見つけたのは、初稽古の帰りのことだった。

正月が明けて、楽しみにしていた稽古開きの日だった。この新たな年で十を数える歳になった巳之助は昨年の末に席次を一つ上げ、この初稽古の日に、名札を一つ右に移されるのを楽しみにしていた。果たして、新たな場所に己の札を架けられていたことは深い感慨を湧きあがらせ、それを目にした巳之助は、大いに自信を膨らませたのであった。

昨年辺りから、己の腕がめきめきと上がりはじめたのに、巳之助は気付いていた。肉体に力がつき、竹刀に振り回されなくなったこともあるが、何より、相手の剣尖がしっかりと目に映るようになって来た。竹刀を振り、相手の攻撃をかわし、受け止めるので精一杯であったのが、少しずつ、相手が次にどう打とうとしているのかがわかるようになってきた、ような気がする。それにあわせて、ふわふわとしていたような腰が、どっしりと据わるようになってきた。

そうなると巳之助は、同輩たちの中でも一歩抜きん出るようになった。先輩格の者たちはともかく、同年同期の者たち相手であれば三本に一本も取らせない。気付けば、そうなっていた。

そしてまた、奢り高ぶってもいた。

巳之助が遭遇したのは、そのようなときである。

帰り道。両側を田畑に挟まれたうねる畦道を歩いていた巳之助はふと足を止めた。

縄のようなものが道に落ちている、とはじめは思った。だが、その縄は動いているようにも見えた。

二、三歩近付いて、それが蛇だとわかった。

黒っぽい胴体で、頭が菱のかたちをしている。開いた口腔からは、長い牙が覗いていた。

毒蛇だ、と思った。

巳之助ら下士の者が住む屋敷町は山郷に近いところにあり、毒蛇や百足については、父や母から何度も厳しく注意を受けていた。だが、実際に毒蛇と思しき蛇に出くわしたのは、これがはじめてであった。

聞かされた毒蛇の恐ろしさに関する話が頭の中を巡る。肩には竹刀袋を負っている。だが、巳之助は袋の紐すら緩めず、ただ道の真ん中で立ち竦んでいた。

毒蛇が道を横切り過ぎ、草むらに消えるまで、巳之助はそのままでいた。そうして、蛇の姿が見えなくなると、腰から砕けるようにへたり込んだ。

動けなかった。何もできなかった。

もしも蛇が巳之助に注意を向け、牙を剥いていたなら。巳之助は成す術もなく噛みつかれていただろう。

先ほどまで身体のうちで膨らんでいた自信が、みるみるうちにしぼんでいくようだった。

よろよろと立ち上がった。

竹刀袋を抱え上げ、それまでと同じ童とは思えぬ、縮こまった姿勢で、地面を見つめて歩き始めた。

ふと、視線を感じたような気がして顔を上げた。道の先。二間ほど離れた場所に、紺地の着物を着た、同年ほどの童女が立っている。見覚えのある顔だった。

二件隣に住む馬場家の娘、お辰（たつ）だった。

見られた。すぐに、そう思った。

巳之助は駆け出した。お辰と顔も合わせず、挨拶も交わさずに、その脇を通り過ぎた。

巳之助は走った。何もかもなかったことになればいい。そう思った。

数日を沈んだ気持ちで過ごした。

顔を合わせるときの少ない父は気付かなかったが、聡い母はさすがに巳之助の様子がおかしいことに気付き、幾たびか気遣いを見せた。だが、巳之助は母に何も語らなかった。言えるわけがない。そう思った。
あの日のことを思い出すだけで、顔と胸が熱を持ち、大声で叫びたくなる。その気持ちを何とか抑え、ときには竹刀を無茶苦茶に振ることで、心のうちより追い出そうと努めた。
何よりも恥を感じるのは、お辰に見られたことを、思い出すときだ。
馬場家は下士の家でありながらも、父母共に厳格な質であるらしく、お辰も折り目正しく落ち着きのある、口数の少ない慎ましやかな娘であった。
だがその眼差しは常に厳しく、同輩の者たちに対して、他の娘のように媚びたり軽口を叩いたりするようなこともなかった。　友人たちの間で、お辰の名が出たことがある。あの娘は堅苦しくて苦手だ、というのが友人たちのお辰に対する共通した評だった。だが巳之助は、お辰の振る舞いこそはまさに武家の娘が持つべき矜持なのではないかと、密かに尊敬の念を抱いていたのであった。
そんなお辰に、無様なところを見られた。それが、巳之助は悔しくてならなかった。
その日もお辰が彼を見下げた眼差しで罵倒する悪夢を見、汗だくで目を覚ました巳之助は、気持ちを切り替えようと庭で竹刀を振るった。
二百を数えたところで切り上げた。汗を流すため、裏の共同井戸へ足を向ける。
そこで見たのは、今、巳之助が最も会いたくないと思っていた娘だった。
お辰が井戸の傍らに佇んでいる。気付いた巳之助は足を止めた。
すぐさま引き返したい思いに捉われる。だが、勇気を振り絞り、前へ踏み出した。
挨拶を交わそうとして、お辰の様子がおかしいことに気付いた。
お辰が身動き一つせず、立ちすくんでいる。目だけを動かして、巳之助に何かを伝えようとしている。
視線の先を追った。
井戸の周囲に敷き詰められた砂利を、細い縄が一本、這っている。蛇だ、とすぐに気付いた。
お辰を見返す。小さく頷いた。その瞳が、何かを訴えている。
助けて、と言っているのか。逃げろ、と言っているのか。
にじるようにして、半歩前へ出た。
お辰の首が、今度は横に小さく振られる。それでわかった。
そうだ。この娘は、そういう娘だ。
あの日の恥が思いだされ、胸の奥底からわき上がってくる。顔が熱くなった。
左手に提げていた竹刀を両手で握り、やや後ろ、脇構えにつけた。
ひとりなら耐えられず、逃げ出していたかもしれない。だが今この場には、お辰がいる。
お辰を守る。心のうちで、そう定めた。
蛇の頭が巳之助を向く。威嚇するように、しゅるしゅると音を鳴らす。
剣先を地面すれすれに置いたまま、摺り足で僅かずつ、詰める。間合いよりはまだ遠い。だが蛇は、ひと跳びで巳之助の懐に潜り込むだろう。
呼吸を整え、蛇とその周囲に目を据える。蛇と巳之助の中ほど辺り。お辰が落としたものか、洗濯板が砂利の上に傾いで転がっている。
心を決め、前から横に、歩みを移す。板と蛇と己が、ちょうどまっすぐに来るように。ゆっくり、ゆっくりと間合いを移した。
蛇の頭が、板に掛った。
大きく一歩を踏み出す。竹刀を強く突き出す。
蛇には届かぬ。だが、板には届く間だった。

ぱん、と乾いた音を立て、砂利を巻き上げながら板が持ち上がる。その上に乗らんとしていた蛇が宙を舞った。
中空で蛇が鎌首を伸ばす。だが、巳之助までは届かない。
剣先で地を擦るように。
落ちかかる蛇の頭を、下から打ち上げた。ほああ、と意味のわからぬ叫びが口を突いて出た。
井戸の向こう側まで飛んだ蛇が、地に落ちる。竹刀を構え、追撃に備える。だが、蛇はぴくりとも動く様子を見せなかった。
縛めが解けたように、お辰が動いた。
走り寄って来るお辰を左腕で受け止め、巳之助はようやく剣を下ろした。
「大事ないか」
そう問うと、はい、と小さな声が返ってきた。
「この間は無様なところを見せた。だが今日は、立ち向かうことができた」
晴れ晴れとした顔でそう告げる。だが、お辰は首を振った。
「何事もなく、息災でよかった。そう思いました。今日も、この前も」
ああ、と巳之助は悟った。
小さいな。俺は、小さい。
それに比べてこの娘の、何と広大なことか。
「俺は大きな男になるぞ、お辰殿」
顔を朱に染めながら、それでもはっきりと、巳之助はお辰に告げた。この娘に聞いてほしい。そう思っていた。
目は合わせない。だが確かに。はい、という返事を、巳之助はその耳に聞いた。

（完）

町の外へと続く道を、馬久一太郎（うまくいったろう）は早足で歩いていた。
顔はわずかに紅潮し、頭の中では母の言葉が何度も何度も繰り返されている。
それに対して何だ、何だと小さな声で毒づきながら、一太郎は休まず脚を動かし続けていた。
点在する家々や田畑の景色は遠くなり、周囲は少しずつ、人の手の入らぬ山野へと近づいてゆく。だが一太郎は構うことなく、ずんずんと進んだ。
「馬久家の再興が認められました」
母はそう切り出した。
昨年の夏以来、馬久家はおそらく、一家が立ってから今までになかったであろうほどの危機に瀕していた。一太郎の父である馬久一嘉内（うまくいかない）は馬方の御役目についていたのだが、今年の夏、一頭の馬が厩場から逃げ出すという騒ぎがあった。
その際に厩場の役を担っていたのが父の一嘉内であった。悪いことは重なるもので、その馬は藩主のお気に入りの一頭でもあった。
逃げた馬は近隣の里山に逃げ込み、捕えることは遂に叶わなかった。その事態の責めを負って、一太郎の父は腹を召す仕儀と相成ったのだった。
本来ならそのまま取り潰されてもおかしくはない馬久家であった。が、事態の詳細が解明されるまで処分は留め置かれるということで、どっちつかずの状況のまま、年を越すこととなった。
新たな年が来て、年頭に藩主より細々としたまつりごとに関する下知があった。その中にいくつかの恩赦が含まれており、馬久の名もそこに含まれていた、とのことであった。
そうして、馬久家は残されることになったのだ。
理由は様々にある。まず何より、いくら藩主のお気に入りの馬であったとはいえ、切腹は重すぎる、という意見は随所で大きかった。有事の際におろそかにはできぬ馬ではあるが、ここ数十年もの間、戦は絶えて久しい。常に戦に備えるのだ、という心持ちはすでに藩内にも薄く、それを声高に唱えたところで、意見に追従するものは少なかった。
もう一つが、その日様子を窺いに来た父の上役が、出入りの際に柵を閉め忘れたのではないか、という疑いであった。
その日、父の上役である吾巳大次郎（わがみだいじろう）が、見回りにやってきた。この見回りは定期的に行われており、ちょうどその日が訪れる日に当たっていたのだ。
出迎えは不要とされているので、一嘉内はいつもどおりに馬の蹄を手入れしていた。そこに吾巳がやってきて、馬の育成具合や、変わったことがないか、などと言ったことを聞き取りし、厩場を見回ってから帰ったのだという。
藩主お気に入りの馬が暴れ出し、厳重なはずの柵を容易く破って逃げ出したのは、その後のことだった。
この件はかなり厳しく取り調べられたようであったが、一太郎や母のもとに詳しい話が伝えられることはなかった。ただ父と親しかった同僚たちから、そういう話を噂として漏れ聞いただけだ。
そうして、恩赦の話だけが、唐突に舞い込んで来たのであった。
それらをつなぎ合わせたうえで、上役の失態はあったのだ、と一太郎は考えた。それ以外に、納得の仕様がなかった。
母は喜んでいた。だが、それでいいのか、という思いが一太郎にはある。
武士というものの生き方に、一太郎は疑いを抱きはじめていた。

父は上役の失態の責任を取り、腹を切らされた。それは武士であったからだ。そういう生き方を己もするべきなのか。
したくない。一太郎ははっきりと、そう思っていた。
それにもうひとつ。もしも一太郎が馬久の家を継げば、何事もない限り父と同じく馬方の御役目につくことになる。それが、一太郎はいやだった。
誰にも言ったことはないが、一太郎は馬が苦手だ。いや、馬だけではない。鼠、牛、兎、蛇、とにかく生き物というものが、すこぶる苦手だった。人がいるところではできるだけ平然とし、表に出さないようにしているが、できるだけ近づきたくないし、触るなどとんでもないと思っていた。
町にある黄表紙屋の御隠居などはその屋敷に猫を飼っているらしいが、一太郎にはとてもではないが考えられぬ話であった。
いっそのことこのままお家取り潰しになればいい。そう願っていた。だが。
馬久家は再興される。子は一太郎ひとりしかいない。父の代わりに一太郎は、近々御役目を継ぐことになるだろう。
ともかくも、今の気持ちを抱いたまま、跡目を継ぐわけにはいかなかった。
気づけば、身の回りのものをまとめ、家を飛び出していた。
何かのあてがあったわけではない。ただただ衝動的に、そうしていたのだ。考えるよりも先に、情に任せて身体が動くたちで、そのことでこれまでにも失敗をいくつかやらかしていた。今回も、そういった考えなしの行動の一つだった。
どうしたものか、と隣の村へと続く街道を歩きながら考えはじめていた。いっそのことこのまま藩を出て、誰も知るものがいない土地で町人か農民として暮らすか。貧しくはあったが、本当の苦労というものをしたことがない一太郎は、お気楽にそんなことを夢想していた。
そんなときのことだ。道の先が、何やら急に騒がしくなった。
足を止める。曲がった道の先から、旅姿のものが幾人か、走ってこちらへと向かってくる。
その中に、知った顔を認めた。周囲のものより目立つ赤い着物を着て、男の供をひとり連れている。父の上役であった吾巳大次郎の娘だ。親しいわけではないが、顔はよく知っていた。
曲がり道の先で砂塵が巻きあがっている。暴れ馬だ、という叫びも聞こえた。
砂煙の向こうから、それは姿を現した。
馬だった。さほど大きい馬ではない。だが馬は高く嘶きを上げながら、道を右へ左へと迷走している。
鞍は乗せられていない。が、綱はつけられていたので、どこかの飼い馬であることはわかった。
それを目にした途端、一太郎の身は竦み、足は縫いとめられたかのように動かなくなった。
馬は暴れながら、こちらへ近づいてきている。だが、それがわかっていながらも一太郎はまんじりとも動けなくなっていた。
その左右を数人が駆け抜けてゆく。足の遅い吾巳家の娘とその供だけが、荒ぶる馬と立ち竦む一太郎の間に取り残されていた。
娘と馬との間が縮まってゆく。どうも馬は娘を狙い、暴れているようだった。
追いついた馬が前脚を高く持ち上げる。娘の悲鳴が一太郎の耳に届いた。
気付けば、足が動いていた。駈け出しながら鯉口を切り、抜刀した。
様々なことが頭をよぎっていた。父の敵ともいえる上役の娘である。このまま放っておいて、馬の蹄にかけられるのを見ていればいい。一太郎が手を下すわけではない。ただそこに居合わせただけのことだ。
別のことも浮かんだ。だが吾巳家は、父が死んでからこちら、組屋敷でも肩身の狭い思いをしているとも聞いている。吾巳大次郎が原因であったのではないかという噂は、かなり広く流布されていて、今やそ

れが真実であろうとの認識ができつつあった。そんな中で、現状一切の責めを負っていない吾巳家は、周囲より白い目で見られている、というものだった。
　だがそのようなものとはお構いなしに、やはり一太郎の身体は、勝手に動いていた。
　悲鳴を聞いたとき。武士として己が守らねばならぬ。頭ではなくこころのうちがそう判じたのだ。
　娘たちの横を駈け過ぎると、着物が汚れるのも構わず、地面を転がって馬脚へ近づき、刀を振るった。
　そのまま転がりながら暴れ馬から離れる。馬は娘たちから逸れつつしばらく走ったが、一太郎を敵と認めたのか、こちらへと向き直った。
　動きを止めず、そのまま突進してくる。地に膝をついたまま、一太郎は右手を握りしめた。
　右手には転がったときに拾い上げた石が握り込んである。近づいてくる馬の脚をめがけて、それを放った。
　石つぶてが飛ぶ。過たずそれは、暴れ馬の脚を打った。
　馬は動きを止めない。一太郎は再び転がり、茂みの中へと逃げた。馬は街道を駆け抜け、砂煙をあげていたが、遂に四つの脚を折って止まった。
　一太郎は寝そべり、天を仰いでいた。
　父から聞いたことがあった。馬の蹄というのは本来頑丈なものなのだという。だが人に飼われ、同じ道を歩き、背に人や荷を載せるといったことを日々続けている馬のそれは、次第に脆弱になる。そういう話だった。
　そして脆くなった蹄は、わずかの傷を負っただけでも走れなくなることがあるのだという。
　だから一太郎は、馬の蹄を狙い、つぶてを放ったのだ。
　武士を捨てるつもりであった。だが一太郎を動かしたのは武士であるという覚悟であり、窮地を救ったのは、馬方であった父の言葉であった。
　娘が近寄ってくる。一太郎のことがわかっているのかいないのか、涙を流しながら頭を下げている。一太郎はそれに気付かぬふりをして、ただ寝そべり続けていた。
　ともかくも、次からはもそっとものを考えてから動くことにしようか。青い空を眺めながら、そんなことを思っていた。

（完）

もしかすると自分は同年の他の者より少し優れているやもしれぬ、とはじめに思ったのはいつだったろう。

たしか十を数える歳になったときだった、と少し考えてから日辻乾武郎（ひつじかわかぶろう）は思い当たった。

道場で、先に入門していたひとつ年長の相手から二本を取ったときだ。同年同期の者たちから見て、乾武郎は一歩抜きん出ようとしていた。

ほぼときを同じくして、学問所の方でも、乾武郎は年長者たちの勉学を越えようとしていた。利発で物覚えがよろしい、と講師の先生からも褒められる言葉を貰うことが増えていた。

日々を過ごすのが息苦しいと感じはじめたのも、そういえばちょうどその頃だ。

日辻の家は軽輩である。日辻家とほぼ同格の家の子息で、武芸と学問の両方を身につけようというものは少ない。そういうものは、大抵余裕がある格の家である。乾武郎が武芸も学問も習わせてもらえているのは、ひとえに父、数衛（かぞえ）の意向である。

ありがたいことではあろうと思う。だが近頃、それがとみに背に重く圧し掛かってくる気がする乾武郎であった。軽輩の子に追い抜かされることを、多くの者はよしとはせぬであろう。乾武郎への風当たりはすでに強くなりつつあった。

何とかしたいと思い、乾武郎が採ったのは、己の練達を表に出さない、ということであった。力が伸びた、と感じたぶんを押さえ込み、それまでと同じ力量で表に出す、ということをはじめたのである。そうしているうちに他の同輩どもは乾武郎に追いつき、先輩たちは追い越してゆくだろう。それらを気にしなくなった頃にはおそらく元服を果たし、道場や学問所に通うこともなくなるであろう、というのが乾武郎の考えであった。

そういうことを乾武郎がやりはじめてから、一年ほどが過ぎた。

正月を過ぎ、寒風が藩の全土、山をはじめ峠、河原、町中までもを勢いも強く抜けてゆく。雪こそ薄くつもった程度であったものの、綿入れなども用意しておらぬ日辻家にはなかなかに厳しい春となった。

身体を震わせ縮こまらせつつ、乾武郎は年初めの稽古へと向かっていた。乾武郎が力を抑え隠しはじめてから、それまでさまざまな形であった嫌がらせは減った。そのぶんだけ、乾武郎も稽古や学問に力を入れられるようになってきている。

最近気付いたのは、己はどうも武芸よりは学問の方が好きなのではないか、ということだ。剣も嫌いではないのだが、学ぶこと、それまで知らなかったことを知るということに、乾武郎は惹かれる。

ひつじ、という生き物のことを知ったのは、少し前のことである。未は十二支にも入っている生き物だが、それがどんなものであるのか、乾武郎は知らなかった。

目にしたことがないのは寅、辰も同様であるが、これらは生き物というよりはいわば神仏のようなものであり、画や彫り物というかたちで目にすることができる。だが、未に関してはこれまでにその姿を見たことはまったくといってなかったのだ。

全身に長い毛が生えているのだという。南蛮では、その毛を刈って衣をつくるのだという。未の毛でつくられた衣は、どのような寒さにも耐えるのだ、ということだった。あちらではその肉も食するということであるから、こちらでいう鹿の、毛の長いようなものだろう。乾武郎はそのように思い描いていた。

未の毛でつくった衣。そのようなものを一度でいいから着てみたい。乾武郎はそう思う。こんな寒い日であれば尚更だ。

未の衣はともかくとしても。そういうものをたくさん知りたいし、見たいと乾武郎は思う。だが学問所の中でも、そのような思いを強く抱いているのはどうやら乾武郎だけのようであった。
そしてそんな乾武郎に気付いているのは、学問所の谷木（やぎ）先生のひとり娘、お角（すみ）どのだけだろう。
お角どのは年の頃が乾武郎と同じくらいの、滅法気の強い娘である。弁が立ち、何やらちょっかいをかけたらしい少年たちがやり込められるのを、幾度か見たことがある。立ち居振る舞いも武家の娘というよりは町娘のようであった。
普段はそれほど接する機会のなかった乾武郎であったが、しばらく前、講義が終わったのちに、門のところで考え事をしていた際に、捕まったことがある。
「そんなところで立ち止まって、何をしているのです」
強い口調で問い詰められたのでつい、先ほどまでの講義で疑問に思ったことがあったのだと明かしてしまった。
ひつじ、というのはどこへゆけば見られるのだろうか。やはり西国の、南蛮人が住んでいるというところまで行かねば見ることができぬのであろうか。そのような話をしたと思う。
それを聞いたお角どのは、大人びた仕草でさぞ訳知り顔のようにして頷き、何事にも疑いを持ち、己の目で確かめようと思うのはよい心がけです、とのたまったのだ。
それ以来、顔を会わせば寄って来て、乾武郎が今何を思案しているのか、と問い質すようになった。乾武郎の思案は、新たに知った事柄への疑問であったり、または水はどうして氷を張るのかなどといった身近なことへの疑問であったりする。それらに対して、お角どのは、己の知っていることであれば答え、知らないことであれば一緒に考えてくれなどもした。
そうした友誼ともいうべきものを少しずつ、ふたりは重ねていたのだった。今では、お角どのに会えるかもしれぬ、ということが、学問所へ通う乾武郎の楽しみの一つともなっている。
道場は、日辻の家がある長屋町とは城下を挟んで向かい側にあるため、屋敷町を抜けてゆく。その屋敷町の片隅に学問所はある。
雪に脚を取られぬよう気をつけつつ、長屋町と屋敷町を繋ぐ橋を渡ったところで、聞き知った声を耳にした。
橋を渡った先には柳が植えられている。雪を被った柳は常よりも重そうにして頭を垂れている。
その柳の立ち並ぶ辺りで、ひとりの娘と年若い侍が言い争っている。
耳にしたときにはすでに、わかっていた。お角どの。そしてお角どのに絡んでいるのは、以前に乾武郎が道場で打ち倒したことのある年長者だ。
兵馬（ひょうま）。確かそのような名であったと思う。その兵馬が以前よりお角どのに言い寄っていたのは知っていた。顔がやや赤い。おそらく、正月の貰い酒でもどこかで受けてきたのであろう。暖かそうな綿入れを羽織っている。
兵馬の手が伸び、お角どのの手首をつかんだ。それを見て、堪らず跳び出した。
「やめろ」
二つの顔がこちらを向いた。一つは嬉しそうな顔を見せた後、すぐに眉根を寄せる。もう一つは、向けたときからすでに怒り顔だった。
「日辻か」
手を離し、兵馬が向き直る。
「お主には関わり合いのないことだ。失せろ」
「そういうわけにはいかぬ。嫌がっておられるではないか」

静かに、そう告げた。それを裏付けるかのように、お角どのは兵馬から離れる。
「おのれ、邪魔立てするか」
兵馬が背負っていた竹刀袋を降ろし、紐を解いた。仕方なく、乾武郎もそれに倣う。
「ちょうどよい。稽古の前に、一本叩きのめしてやろう」
怒れる顔は、にやついた笑いに変わっていた。
このところ、乾武郎は年長者に勝つことがとみに少なくなっている。家格が上のものにもだ。兵馬は年長者であり、日辻よりもよい家の出でもある。稽古場で相対したときに乾武郎が勝つことは、はじめてのとき以来なかった。
今では、己の力を誇示するのによい相手だと。そう思われている。
兵馬の腕は悪くない。席次も、彼と同年代の者たちの中では上位につけている。だが、本気の乾武郎であれば、ほぼ互角に打ち合えるであろう。
道場であれば、誰か抑えてくれる者がいる。だがここは道端であった。見ているものは、お角どのしかいない。酔っている兵馬が限度を覚えているか否かはわからぬ。
全力で迎え撃つべきか。乾武郎は迷っていた。
構えた兵馬が打ち込んできた。鋭い正面の打ち下ろし。芸はないが、年長で身体が大きいだけに力がある。乾武郎は受けずに逸らした。
雪に草履が滑る。足元も、兵馬はよいものを履いている。雪道であるから草履は脱げぬ。利は兵馬にあった。
視線を感じる。お角どのが心配そうな顔で見ている。ふと、目があった。お角どのが顎を上に向ける。柳。
兵馬の横を滑り抜け、柳の幹を打った。
木が揺れ、雪が落ちる。ふたりともに雪を被りつつ、柳の傍らで対峙する。
竹刀を正眼に構え、乾武郎は待った。
兵馬が打ちかかって来る。こちらからは打ち返さず、勢いを殺すに留める。
衣にまとわりついていた雪が溶け、濡れた着物が身体に張り付く。
乾武郎が待っていたのは、これだった。
未の毛の衣は寒さに強いが、そのぶん水に弱いのだという。それは、お角どのが教えてくれたことだった。
兵馬が着込んでいる綿入れもそうだ。乾武郎が着ている麻よりも水をよく吸い、そして水を吸うと、とてつもなく重くなる。
そして水を吸った綿入れは、急激に身体の熱を奪うのだ。
赤みの差していた兵馬の顔色が、青白く変わっている。酔いは、覚めたようだった。
「打ちなさい」
声があった。考える間もなく、身体が動いていた。
乾武郎の竹刀が兵馬の右腕を打つ。兵馬は竹刀を取り落とした。
腕を押さえながら、兵馬が睨みつける。構わず、己の竹刀を片付けた。兵馬が怒っているのはかたちだけだと、わかっていた。頭が冷えた今、己が何をしでかそうとしたかは、わかっているだろう。
軽く頭を下げ、お角どののもとへ向かった。
手を握った。嫌がらなかった。
ふたりで小走りに、その場を離れた。
「おやめなさい、ああいうのは」

　お角どのが隣で言う。
「多くのものを見たいのでしょう。知りたいのでしょう。ならば、己を偽るのはもう、おやめなさい。それで開かれる道が、あるはずよ」
　そうか。そういうものか。
　打ちなさい。その言葉に突き動かされた己というものを、乾武郎は今一度、思い返していた。

（完）

隠し剣　十二支抄
http://p.booklog.jp/book/17429

著者：緑乃帝國

著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/chabayashi/profile

ウェブサイト：馬車馬堂　御茶林研究所

発行所：ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/）

運営会社：株式会社 paperboy&co.

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/17429

ブクログのパブー本棚へ入れる
http://booklog.jp/puboo/book/17429